

宗田一先生と日本医史学会

日本医史学会常任理事 酒 井 シ ヅ

札幌で行われた一九九六年六月二十二日の総会の席上、宗田先生が危篤状態だと聞き、我が耳を疑った。が、それからまもなく、七月七日に先生は他界された。

一九九五年の総会では、例年と変わらぬお元気な様子で出席され、「関西大震災でひどい目にあつて、書庫の本棚が倒れて無茶苦茶や。文献の探しようもあらへんで、あかんわ」といわれながらも、発表者に助言を与え、若い人を激励し、総会では常任理事として活躍されていた。このとき「神戸のような被害もなくてよかったですね」と先生を慰めるつもりでいつていたが、後で聞くと、この頃から雑誌の連載も途絶えていたという。それを聞いて、先生にとつて震災の打撃がいかに大きかったかを改めて知つたのである。

今年、一九九六年一月の常任理事会に出席されたときに、会場まで同道した方から「宗田先生はずいぶんゆつくり歩かれる。お年をとられたせいかな」と聞いたが、その時も「そうですか」とそれほど気に留めることもなかった。なぜなら理事会では別に気になることもなく、お元気であつたからである。しかし、このときが先生にお目にかかつた最後になつた。夢にも思わなかつたことである。多くのことをまだたくさん教えていただかねばならなかつた。とくに一九九九年、医史学会総会一〇〇回を記念して発行する医史学会史編纂には、学会の生き字引であつた先生の力をお借りして思つていただけに、残念でならない。先生の学問的なことはおそらく多くの方が書かれるであろう。そこで、先生が学会に尽くされたことについて記すのは私の役目だと思う。

わたくしが一九六七年に日本医史学会に入会したとき、医史学会の会員は二〇〇名余で、会費納入者が五〇%を切る状態であった。雑誌も定期的に発刊されなかった。それに対して、関西支部の中野操先生が厳しい批判をされていた。その批判を受けながら、徐々に軌道を整えていったのであるが、宗田先生は終始、関西の立場だけでなく、学会全体の運営が健全になるように助言してくださった。とくに吉富製薬で会議の運営の方法に通じておられたことから、総会運営について手を取り、足を取り指導してくださった。いま総会が恙無く運営されるのは、その基礎を宗田先生が作ってくださったからである。例えば毎年学会の前になると、議事運営の仕方のシナリオを書いてくださった。それがかなり長い間続いていたのである。

いま会員の数も増え、医史学会の運営も安定してきたが、先生が去られたいま、先生の常任理事として発言されておられた言葉の重みがいかに大きなものであったかをつくづくと感じている次第である。

合掌